

日本文学研究(古典)

西田 隆政

古典文学全般の展望となると、稿者の力不足と紙幅の関係で不可能である。そこで、稿者も所属する中古文学会のあり方から、現在の古典文学研究の状況について展望していくことにしたい。

従来、中古文学会では、5月と10月の週末土曜日と日曜日に大会を開催し、10あまりの研究発表が行われるのが常であった。それが、2014年度からは、大会の運営方法が大きく変更され、定例的にシンポジウムが開催されるようになった。

この背景には、古典文学研究を取り巻く厳しい状況がある。従来の古典作品を丁寧に読解する、そこから芸論を展開するといった、古典を研究すること自体が自明の価値のある行為であるという社会的な評価が失われてきたことによる。

具体的な事例を見ると、2014年度春季大会ではミニシンポジウム①「定家本・青表紙本『源氏物語』とは、そもそも何か」とミニシンポジウム②「中古文学会で、中世王朝物語を考える」、2014年度秋季大会ではシンポジウム「源氏物語 典拠と準拠の再検討」、2015年度春季大会ではミニシンポジウム①「平安時代はなぜ女性書き手の文学を輩出したのか」とミニシンポジウム②「注釈のジェンダーバイアスを問う」、2015年度秋季大会では大会企画シンポジウム「室町戦国期の『源氏物語』一本の流通・注の伝播」となっている。

一見して理解されるように、平安時代

という枠を超え、さらには、文学の享受された社会を見据えた学際的なテーマへの展開も試みられている。ただ、それらが、機関誌『中古文学』への原稿として掲載されたものを見ると、積極的な問題提起という方向性は見られるものの、どのように発展させていくのか、という点からすると、まだ具体的な研究方法や成果が提示される段階ではないことが看取される。

また、シンポジウムで取り上げられたテーマ自体も、中古文学会で統一テーマとして取り上げられた意義は大きいものの、これらのテーマは、いずれも隣接研究分野や関連する研究分野では、すでに当たり前に行われていることであり、特に目新しいというものでもない。

確かに、これまでの中古文学会のあり方からするならば、画期的な試みである。時代別という、伝統的な古典文学研究の枠組みを超えていこうという意欲も非常に強いものである。しかし、これを具体的な営為として形にするのは、これからの各研究者自身の課題となり、それは非常に困難なものであることは、おのずと予想される。

これは、単に古典文学研究だけでなく、現在の人文系の研究全般にも通じる問題である。昨今、社会全体から人文系の研究への評価が非常に厳しいものとなっている。そのような中で、表現学やその関連分野の研究も、その存在意義や研究の価値を積極的に打ち出す必要がある。そして、これこそが、表現学に関わる、各研究者に課された、大きな課題ということになろう。

(甲南女子大学)